

*Absalom, Absalom!*における Faulkner の語りの技法(I) Faulkner's Narrative Technique in *Absalom, Absalom!* (I)

重 迫 和 美
Kazumi SHIGESAKO

Faulkner's novel *Absalom, Absalom!* comes to an end with an unsettled mystery in the reader's mind: why did Henry Sutpen have to kill his beloved brother Bon? Although the ambiguity in the novel has been thought of as a fault for many years, Faulkner scholars recently have come to consider this ambiguity as the essential quality of a new form of fiction which makes the reader involved in its story. So far, however, it does not seem to have been noted that it is Faulkner's unique use of narrative that creates this special effect. It is Faulkner's distinctive narrative technique that forces readers to participate in the story, but also enables them to achieve a fuller understanding of the novel as a whole. In this paper, in order to try to help clarify Faulkner's special narrative technique, I will examine Chapter I of *Absalom, Absalom!*, concentrating on the shifts of voice and perspective in the novel.

William Faulkner の *Absalom, Absalom!* (1936) は、poor white 出身で大荘園を一代にして築いた Thomas Sutpen (1807-1869) を当主とする Sutpen 家の没落していく様子を Miss Rosa Coldfield (1845-1910), Mr. Compson (生年未詳, 1910年現在存命中), Quentin Compson (生年未詳, 1910年現在 Harvard 大学在学中), Shreve McCannon (生年未詳, 1910年現在 Harvard 大学在学中) という4人の character 達が語るという設定の作品である。Faulkner の作品は全般的に、数ページにわたる長い文章、多用されるイタリックスや括弧、造語など難解な文体で書かれていることが知られている。こうした文体上の難解さに加えて、この作品の場合は、Sutpen 家の悲劇の物語についての4人の character 達の証言が互いに食い違っているところがあることと、この悲劇のクライマックスである Henry Sutpen による Charles Bon の殺害という事件についても殺害の動機の真相を明らかにしてくれるものがいないことから生じている物語内容の曖昧さが問題になっている。

この作品が出版された当時の批評においては、読者に、このような事件未決着の印象を与える曖昧さは、徒に読者を惑わせるものとして作品の欠点と見なされてきた¹。そして今日では、従来の小説作法から考えれば欠点としてしか評価され得ないような曖昧さを持った *Absalom, Absalom!* は、むしろ因習的なしきたりに挑戦した新しい小説として積極的に評価され、この作品はそれまでの作品によっては与えられない独特の読書体験をさせてくれるのだと評される傾向が定着している。しかしながら、この特殊な読書体験がどのようなものであるかについては、具体的、かつ総合的に検討されてきたわけではない。そこで、この小説特有の読書体験について考察するため、これまでどのようなことが既存の作品によっては味わえない新しい読書体験として指摘されてきたのかをまず比較検討しておきたい。

数多くの批評家達の意見を分類すると、以下の3種類に分けることができよう。代表例を挙げながらみていこう。H. H. Waggoner は、“No doubt *Absalom* gets its chief effect as a novel from our sense that we are participating in its search for the truth. *Absalom* draws us in, makes us share its creative discovery, as few novels do. The lack of an authoritative voice puts a greater burden on us as readers than we may want to bear.” と述べ²、この作品は読者を作品の物語世界

に参加させるのだと主張する。Richard P. Adamsは Virginia 大学での Faulkner 自身の言葉を引用しながら³, 特に Quentin と Shreve が, Henry と Bon に自分達を同一視しながら殺人事件を引き起こすに至った事件の経緯を推測する場面を例に挙げ, “This process of assimilation develops a strong contrapuntal structure for the book as a whole, which finally has to be completed by the reader’s ‘fourteenth image of that blackbird which,’ Faulkner said in the interview, ‘I would like to think is the truth.’ The reader moves with Quentin, and beyond Quentin....” と言う⁴。また, Ilse Duso Lind は, “Only the reader has a full view of the stage. He sees, as it were, two tragedies on a single theme, simultaneously enacted. The curtain lifts on a play within a play: on the inner stage, the Sutpen drama; on the outer, the largest social tragedy involving the narrators.”⁵ と評している。彼等の主張においては, いずれも, 作品を十分に鑑賞するために必要とされる読者の役割の大きさが強調されており, このことがこの作品特有の特色なのだと考えている点で共通している。しかし, よく見てみると, 読者の立場について, 3者とも異なる事象を説明していることが分かる。Waggoner においては, ①読者は, Quentin と自分を同一視して Sutpen 物語について彼と同じ関心を抱き, 他の character narrator 達と同じ水準で Sutpen 家の謎解きに加わる, という意味において作品世界に参加する⁶。Adams においては, ②読者は Sutpen 家の謎に関して, Quentin を始め他の character 達と同じ水準で Sutpen 家の謎解きに加わるが, ある点までは Sutpen 家の謎解きを Quentin とともに行ってきたにもかかわらず最終的には彼を越えて (“beyond”) しまう⁷。そして Lind においては, ③読者は Quentin をも 1 character として相対化し, Sutpen 一家だけでなく, narrator 達の出演する物語をも含んだ作品として, 小説全体を鑑賞する視点に立つ⁸。

もし, ①の読者を Quentin と同一化させるような仕組みだけが働いているなら②の読者と Quentin を持つ Sutpen 家の真実に関する情報の差は生まれまいだろう。また①②に共通の, 読者を character narrator と同一水準におかせるような仕組みだけが働いているなら, ③の Quentin をも相対化する視点を読者が得るのは難しいだろう。結局, *Absalom, Absalom!* においては, ①読者を Quentin と同一化させる一方で, ②Quentin と読者の持つ情報に差をつくり, さらに③Quentin をも相対化する視点から作品を鑑賞させるような, 複合的な仕組みが働いていて, それこそがこの作品に独特な読書体験を生じさせる原因であると考えられる。この特殊な効果を生み出す仕組みを明らかにするため, 本論では, その第1段階として第1章を検討してみたいと思う。

I

Absalom, Absalom! に特有とされる読書体験を生む語りの仕組みを考察する際には, 物語言説の voice の持ち主, すなわち narrator は誰か, ということと, その物語言説の perspective の持ち主は誰か, すなわち語り手の言説の情報提供者が語り手自身なのか, それとも語り手以外の他人が情報提供者なのか, を考えてみるのが有効だ⁹。

私は, この作品は, 物語世界に character として関わらない external narrator と, 物語世界に character として関わっている数人の character narrator 達との言説から成り立っていると考える¹⁰。*Absalom, Absalom!* の external narrator は, 作品中最も信頼できる narrator である。この narrator による言説は, 特定の focal character がおらず, narrator 自身が情報を提供する場合と, 特定の focal character がおり, narrator 以外の character が知覚, 体験して得た情報を提供する場合とに分けられる。character narrator による言説も同様に, 特定の focal character がない場合と, いる場合とに分けられる。*Absalom, Absalom!* の物語言説を, 以上の4つのパターンに分類しうる voice と perspective という2つの項に, time と place という2つの項を加えて, それぞれの転換の様子を調べ, 表にしてみた¹¹。

P.	L.	範囲	external narrator	voice character narrator	character	narrator	perspective character	time	place
3	1-8	From a- motes	Ex.			Ex.		1909.9 afternoon	Miss Rosa's house
	8-10	which- them.	Ex.				Quentin		
4	10-14	There- house.	Ex.			Ex.	Quentin		Quentin
	14-15	Out of- abrupt	Ex.			Ex.	Quentin		Quentin
	15-15	(man-- demon)	Ex.				Quentin		Quentin
5	2-2	this :	Ex.	Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	2-2	It seems		Quentin2	Quentin2	Quentin2	Quentin		Ex.
	2-3	Sutpen		Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	3-3	(Colonel Sutpen)		Quentin2	Quentin2	Quentin2	Quentin		Ex.
	3-4	Colonel plantation		Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	5-5	(Tore- says)		Quentin2	Quentin2	Quentin2	Quentin		Ex.
	5-5	tore-		Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	6-6	which		Quentin2	Quentin2	Quentin2	Quentin		Ex.
	7-7	(Without says)		Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	7-9	without-		Quentin2	Quentin2	Quentin2	Quentin		Ex.
	9-9	only		Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	9-10	(Only- died)		Quentin2	Quentin2	Quentin2	Quentin		Ex.
	10-10	and-		Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	11-11	says		Quentin2	Quentin2	Quentin2	Quentin		Ex.
	11-11	(Saze- her)		Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	11-11	Yes-		Quentin2	Quentin2	Quentin2	Quentin		Ex.
	11-12	(And- Comp.)		Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	12-12	Yes-		Quentin2	Quentin2	Quentin2	Quentin		Ex.
	12-13	Compson		Quentin1	Quentin1	Quentin1	Quentin		Ex.
	13-14	"Because me."		Rosa	Rosa	Rosa	Quentin		Ex.
	14-14	she said.	Ex.	Rosa	Rosa	Ex.	Quentin		Ex.
	14-14	"So-		Rosa	Rosa	Ex.	Quentin		Ex.
	26-26	age."		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	27-27	"Yes-		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	27-27	sum."		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	27-27	Quentin-	Ex.	Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	27-27	said		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	27-27	Only-		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	27-27	that		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	27-27	he-		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	27-27	thought		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	27-28	It's		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.
	28-28	told.		Quentin	Quentin	Quentin	Quentin		Ex.

P.	L.	範囲	external narrator	voice character narrator	character	narrator	perspective character	time	place
	28-33	script	Ex.						
	33-33	which	Ex.						
	1-1	He-	Ex.						
	13-13	in.	Ex.						
	14-14	It's-	Ex.						
	14-14	told	Ex.						
	14-14	he-	Ex.						
	14-14	thought	Ex.						
	14-19	so-	Ex.						
	19-19	earth.	Ex.						
	19-19	Then-	Ex.						
	22-22	his	Ex.						
	23-23	(Q's	Ex.						
	23-23)	Ex.						
	23-23	father's	Ex.						
	23-23	established	Ex.						
	23-23	(even	Ex.						
	23-23)	Ex.						
	23-23	affirmed	Ex.						
	24-24	herself	Ex.						
	27-27	defeat :	Ex.						
	27-27	and	Ex.						
	30-30	hidden	Ex.						
	30-30	(some	Ex.						
	30-30	up)	Ex.						
	30-30	there	Ex.						
	2-2	where.	Ex.						
	3-3	It-	Ex.						
	6-6	a man :	Ex.						
	14-14	violent	Ex.						
	14-14	(Miss-	Ex.						
	14-14	just)	Ex.						
	14-14	end.	Ex.						
	14-14	Quentin-	Ex.						
	25-25	impotence	Ex.						
	26-26	("But-	Ex.						
	26-26	it?")	Ex.						
	26-26	he-	Ex.						
	28-28	buggy :	Ex.						
	28-28	"why-	Ex.						
	32-32	not.	Ex.						
	33-33	"Ah."	Ex.						
	33-33)	Ex.						
	33-33	Mr.Com.	Ex.						
	33-33	said.	Ex.						
	33-33	"Years-	Ex.						
	1-1	"ghosts?"	Ex.						
	1-1	Then-	Ex.						
	1-1	said.	Ex.						
	1-1	"Do-	Ex.						
	2-2	"you?"	Ex.						
	2-2	They-	Ex.						
	3-3	her.	Ex.						
	3-3	"It's-	Ex.						

II

この表に示した分析を元に、「①読者を Quentin に同一化する仕組み」から考えてみたい。Rosa が Quentin に話をするという物語状況から考えれば、読者は Rosa の話を聞くわけであるから、普通は Rosa の方に共感を覚えるはずだ。しかし、*Absalom, Absalom!* においては、Rosa が印象深い character であることは確かであるが、読者は Quentin の方へより強い共感を抱くことになる。

その原因を明らかにするため、まず perspective という観点から物語言説を検討してみよう。Quentin の perspective をとる物語言説の中には、Rosa の場合にはない2つのパターンがある。1つは external narrator が、Quentin の perspective をとるパターンだ。第1章の冒頭は、external narrator の voice で始まり、Coldfield 家の“office”と呼ばれる部屋で Miss Rosa が、Quentin に話をしているのだという状況設定がなされる。ところが、この状況設定に反して、Rosa の声は次第に消えていく。

and the voice not ceasing but vanishing into....Out of quiet thunderclap he would abrupt (man-horse-demon) upon a scene peaceful and decorous as a schoolprize water color,....Then in the long unamaze Quentin seemed to watch them overrun suddenly the hundred square miles of tranquil and astonished earth....¹²

ここでは Quentin が Rosa の話を上の空で聞いていて、伝説的人物 Thomas Sutpen について空想をめぐらせている様子が external narrator の voice で Quentin の perspective から語られている。このように external narrator は、Quentin の知覚、体験したことを読者に示すという働きをすることがあり、その場合 Rosa の話よりも Quentin の内面に焦点を置くことで、読者に Quentin への共感を誘うという効果を生み出していると考えられる。

もう一つは、Quentin が Quentin の perspective から語る時、イタリックスの字体が使われ、その声か、彼の内面の声を写したものとして設定されている場合である。上の引用に続く部分において、Rosa の話に耳を貸さず、自分の物思いに耽っていた Quentin の内面の様子は次のように描かれる。

It seems that this demon—his name was Sutpen—(Colonel Sutpen)—Colonel Sutpen. Who came out of nowhere and without warning upon the land with a band of strange niggers and built a plantation—(Tore violently a plantation, Miss Rosa Coldfield says)—tore violently. And married her sister Ellen and begot a son and a daughter which—(Without gentleness begot, Miss Rosa Coldfield says)—without gentleness. Which should have been the jewels of his pride and the shield and comfort of his old age, only—(Only they destroyed him or something or he destroyed them or something. And died)—and died. Without regret, Miss Rosa Coldfield says—(Save by her) Yes, save by her. (And by Quentin Compson) Yes. And by Quentin Compson. (p.5, 11. 2-12)

ここでは Quentin の意識の中の葛藤が、分裂した2人の Quentin の対話として、()がついているかないかで台詞が区別されながら描かれている。このような意識の流れの手法のせいで、読者は虚飾のない Quentin の気持ちに触れているように感じ、この character の視点を共有していくことになる。また Rosa の Sutpen に関する台詞を彼女の話の文脈とは関係なく、Quentin が挿入している箇所にも注意が必要だ。というのも、この時 Rosa は Quentin に話を続けているのだが、彼女の言

葉は Quentin が挿入しているもの以外は物語言説として記録されておらず、代わりに Quentin の内面の描写が物語言説を支配しているの、焦点は Rosa の物語にではなく Quentin の内面の方に当てられることとなり、その結果、読者の共感、は Quentin の方へ引きつけられていくと言えるからだ。

また、これら2つのパターンが併用されることもある。Rosa の家で Quentin は、相変わらず話続ける彼女の声を聞いている。ところが彼女の声は、彼にとっては単なる音に等しいものであって、全く意味をなしていない。彼は、徐々に自分の想像の世界へと浸っていく。

Meanwhile, as though in inverse ratio to the vanishing voice, the invoked ghost of the man whom she could neither forgive nor revenge herself upon began to assume a quality almost of solidity, permanence...the ogre-shape which, as Miss Coldfield's voice went on, resolved out of itself before Quentin's eyes the two half-ogre children, the three of them forming a shadowy background for the fourth one...and the passive chafing of a youth of twenty telling himself even amid the voice *Maybe you have to know anybody awful well to love them but when you have hated somebody for forty-three years you will know them awful well so maybe it's better then maybe it's fine then because after forty-three years they cant any longer surprise you or make you either very contented or very mad.* (p.8, l. 21-p.9, l. 18)

まず Rosa の話が、徐々に Quentin の耳に届かなくなっていくことが“the vanishing voice”という表現に示されている。同時に、“the invoked ghost of the man”が実体を持ったものとして Quentin の眼前に立ち現れ、やがては、この男 Sutpen の子供達と妻さえ目の前に見ているような気が Quentin にはしてくるのである。続いて彼は、目の前の声だけの存在になってしまった Rosa に、心の中で皮肉を言うのだ。ここでの物語言説が Quentin の知覚の動きにあわせてあることがわかるだろう。その結果、読者にとっては、Rosa よりも Quentin の方がより共感しやすい character になっていく。

一方で、Rosa が perspective をとる物語言説の中にも、Quentin にはない特殊なパターンが1つある。それは、Rosa ではない他の character narrator が Rosa の perspective から語るというものである。Rosa との1回目の会見が終わって帰宅した際、Quentin は父 Mr. Compson と Compson 家のベランダで対話を交わす。「どうして Rosa が自分に Sutpen の話をして聞かせるのか」という Quentin の質問に Mr. Compson は、“She may believe that if it hadn't been for your grandfather's friendship, Sutpen could never have got a foothold here, and that if he had not got that foothold, he could not have married Ellen. So maybe she considers you partly responsible through heredity for what happened to her and her family through him.” (p.8, ll. 14-19) と、Rosa の考えを推測し代弁する。彼が推測した Rosa の考え方には彼女が自分の家族の没落を自分の家族の側の非は一切棚に上げて Sutpen のせいにしてしていることが示されている。この考えは Mr. Compson が推測したものであり彼の Rosa 像が反映されたものにすぎないのではあるが、これから Rosa の私怨に満ちた長話を聞かされる読者には、大きな影響を与える。読者は Mr. Compson の Rosa に対する評価をあらかじめ知ること、彼女が Quentin に語る話には自己憐憫の気持ちが反映されていると感じ、哀れな彼女に深く同情するのが難しくなるのである。

Rosa が話を始める前に、あらかじめ読者が彼女に同情しにくくするような仕組みは、その他のパターンの言説においても見られる。Mr. Compson との対話が行われたエピソードが挿入された後、再び場面は Rosa の家になり、Rosa は Quentin に話をしている。その彼女の様子を、彼女の前に座っている Quentin の perspective から external narrator は、“now only the lonely thwarted old

female flesh embattled for forty-three years in the old insult, the old unforgiving outraged and betrayed by the final and complete affront which was Sutpen's death" (p.9, ll. 22-24) と表現する。この表現には、現在の Rosa が屈折した性格になっていると Quentin が思っていることが示されている。このように、Rosa が Sutpen に偏見を持っているという見方が Mr. Compson や Quentin という周囲の character 達から、彼女が話を始める前に示されることで、読者は彼女への同情の度合いをあらかじめ差し引かれるのである。

III

次に、voice という観点から物語言説を検討してみよう。Quentin と Rosa を比較してみると、Quentin と違って Rosa は自分以外の perspective から語る場合があるということがわかる。“He wasn't a gentleman.” (p.9, l. 25) という台詞で Rosa の長い話が始まり、以下の彼女の語りにおいて彼女は、7回 “I saw.” という言葉を使い、自分の語っていることが彼女自身の直接体験した事実にもとづいていることを述べている。確かに彼女は1909年において、Sutpen 物語についての唯一の生き証人なのであるが、彼女の話は自分の perspective からだけでなく、例えば、“since apparently half of what he [Sutpen] actually did during those five years nobody at all knew about, and half of the remainder no man would have repeated to a wife, let alone a young girl” (p.12, ll. 5-7) と当時の彼女が知り得ない Sutpen に関する情報を、共同体の perspective から周知の事実として語ってしまう。このことは、彼女自身がすでに共同体に噂として広まっていた Sutpen の伝説に色濃く影響されてしまっており、しばしば自分自身で知覚、経験して得た情報を元にしてではなく、共同体の噂から得た情報を元に、というよりは両者を混同して Sutpen 物語を語ってしまうことがあることを示している。

また、やはり Quentin にはない語りのパターンとして、Rosa が external narrator に準じた役割をしているものをあげることができる。表では、external narrator の voice の欄に、Rosa の名前を書くことでこのパターンを示している。その1例が第1章の後半部分の、Rosa が6歳の頃のエピソードで、Sutpen と彼の使用人である黒人達との fighting show をめぐっての Sutpen と妻 Ellen とのやりとりを描いたものだ。ここでの特徴は、Rosa が external narrator の役割をして、直接話法でそのエピソードが描出されていることである。

“Judith?” he said. Oh, he was not lying ; his own triumph had outrun him ; he had builded even better in evil than even he could have hoped.

‘Judith? Isn't she in bed?’

“Dont lie to me, Thomas,’ Ellen said. ‘I can understand your bringing Henry here to see this, wanting Henry to see this ; I will try to understand it ; yes, I will make myself try to understand it. But not Judith, Thomas. Not my baby girl, Thomas.’

“I done expect you to understand it,’ he said. ‘Because you are a woman. But I didn't bring Judith down here. I would not bring her down here. I dont expect you to believe that. But I swear to it.’

“I wish I could believe you,’ Ellen said. ‘I want to believe you.’ Then she began to call.

‘Judith!’ she called in a voice calm and sweet and filled with despair. ‘Judith honey! Time to come to bed.’ (p.21, l. 26-p.22, l. 3)

直接話法の描写においては, narrator が姿を消すことができるという特色がある。読者は直接 character の台詞に接するから、この場合、読者は、そうしたやりとりが実際に起こったであろうことをあまり疑わない。ここでは Rosa は、ほとんど Ellen と Sutpen の間に介入していない。それだけにこの場面の対話は、読者には実際に行われたもののように感じられるわけである。しかし一方、よく考えてみれば、Rosa はその場に居なかったのである。実際に、上に挙げた直接話法での描写に先行する Ellen の perspective から語られている部分においては、“perhaps” が2度用いられているのであり、最終的には、Rosa は、“But I was not there.” (p.22,1.4) と自ら告白するのである。ここで読者は、自分の想像をあたかも、実際に起こったかのように語る Rosa の話全般に対して、信頼を置けなくなるであろうし、そのような語り手に対しては、読者は感情移入しにくいに違いない。

ここまでの検討から、この作品の第1章において、どのようにして読者を話し手 Rosa よりも無口な聞き手の Quentin の方に感情移入させていくのかが明らかになった。それはまず語り手 Rosa が、語り手としては信頼できないという見方を読者に抱かせるような仕組みが働いているからである。Rosa の長い物語が始まる前に、彼女が Sutpen に偏見を持っているということは、Mr. Compson や Quentin に指摘されている。また彼女は、自分の空想を、さも本当にあった出来事であるかのように語ってしまうということや、他人の経験を自分自身の体験であるかのように語ってしまうという、語り手としての信頼を失うような性格の持ち主として描かれている。さらにこの仕組みは、もっとも信頼できる external narrator がしばしば Quentin の perspective から語り、しかも Quentin 以外の focal character はいないということ、また Quentin の心情を表す際に、しばしば意識の流れの技法が使われ、しかも Quentin 以外に意識の流れの技法が当てられている character は、この章では見あたらないことによっても強められている。つまり読者は Quentin の内面により多く接するために徐々に彼の物の見方を共有していくのである。

IV

では、「②読者と Quentin が Henry と Bon との間に起こった事件に関して持っている情報の差を生み出す仕組み」についてはどうだろうか。最初に可能性として考えられるのは、Quentin が上の空で聞いている Rosa の話の中に読者へのヒントが隠されているということである。ところが、Rosa は、Sutpen 物語に唯一直接関わりのある人物であるにも関わらず、Sutpen 家の謎に関しては character narrator 中最も情報の少ない人物としてこの章では設定されている。

この章の冒頭で、Quentin は Rosa の話に関心を持っていない様子が描かれているが、その理由は、external narrator が、Quentin は、“an empty hall echoing with sonorous defeated names” (p. 7, ll. 16-17) であり、生まれたときから “a part of the town’s—Jefferson’s—eighty years’ heritage of the same air which the man himself had breathed between this September afternoon in 1909 and that Sunday morning in June in 1833 when he first rode into town out of no discernible past and acquired his land no one knew how and built his house, his mansion, apparently out of nothing and married Ellen Coldfield and begot his two children—the son who widowed the daughter who had not yet been a bride—and so accomplished his allotted course to its violent... end.” (p.7. ll. 6-14) という Sutpen 伝説を町の噂として知っていたのだと語るように、Quentin がすでにその話を知っていたからである。つまりこの場面においては、Rosa は Quentin 以上に Sutpen 家の悲劇の詳細を知っているわけではないと設定されているのである。また、最も重要な、Judith と Bon との結婚を Sutpen が禁じる原因ともなった、Henry と Bon の間の諍いの原因についても “I saw Judith’s marriage forbidden without rhyme or reason or shadow of excuse” (p.12, ll. 20-21) と

彼女自身が語っていて、自分が詳細な事実を知っているわけではないことを認めている。結局 Rosa は、Henry と Bon の間の諍いの原因についても、なにも知らないと設定されているということになる。これらのことから、Rosa は、第 1 章において Quentin が知っていた以上の情報を持ってはいなかったということが明らかであり、従って、彼女の物語言説において、Quentin の知らない Sutpen 家の謎を解くヒントが読者にもたらされる可能性はないだろうと考えられる。

2 番目に可能性があるのは、external narrator の物語言説のうち、Quentin の perspective から語られた以外の部分において読者へのヒントが与えられているのではないかということである。しかし、第 1 章の中にそのような external narrator の言説はない。この分析の結果のみから最初に想定した *Absalom, Absalom!* に特有の仕組みのうちの一つが誤っていたのだという結論を出すのはあまりに性急すぎる。というのは、そもそも第 1 章では、Henry と Bon はその名前に言及があるぐらいの程度で、町の噂として一般的に知られている彼らの人間関係についてすら何も明かされていないからである。従って、この仕組みの解明については、第 2 章以下の分析に委ねなければならない。

V

最後に「③読者に Quentin を相対化させる仕組み」を考察したい。読者は、Sutpen と同じ時代を生きた人々が出演する Sutpen 物語を Quentin とともに鑑賞し、作品中終始 Quentin と行動をともにすることになり、彼の苦悩を共有することになる。ところが、*Absalom, Absalom!* では、この Quentin をさえ作品の character の一人として他の character 達と同一水準に置き、彼の考え方 (point of view) を相対化して、読者と彼との間に心理的距離を作る仕組みが働いている。物語の冒頭を見てみよう。

From a little after two oclock until almost sundown of the long still hot weary dead September afternoon they sat on what Miss Coldfield still called the office because her father had called it that—a dim hot airless room with the blinds all closed and fastened for forty-three summers...,and which (as the sun shone fuller and fuller on that side of the house) became latticed with yellow slashes full of dust motes which Quentin thought of as being flecks of the dead old dried paint itself blown inward from the scaling blinds as wind might have blown them. (p.3, ll. 1-10)

ここで語っているのは誰か。それは external narrator である。そしてこの冒頭部分では external narrator は、情景描写と場面設定の役割を果たしている。‘they’ という代名詞で characters が導入され、その直後に、they のうちの一人が、Miss Rosa Coldfield であることがほのめかされている。続いて Coldfield 家の “office” と呼ばれる部屋の情景が描かれる。それから初めて Quentin の名前が示され、wistaria の咲く夏の情景が描かれた後、Miss Rosa が、Quentin に話をしているのだという状況設定がなされる。このように、*Absalom, Absalom!* では、external narrator が最初から Quentin を *Absalom, Absalom!* という作品の一登場人物として設定しているのである。この external narrator の働きは、external narrator が読者に Quentin の視点を共有させ、感情移入させる働きをしているという既に検討した点と矛盾するように思われるかもしれない。たしかにこの narrator は、Quentin 以外の登場人物を focal character とすることはこの章をみる限りなかったし、この章の終わる時点までは読者が Quentin に共感するように積極的機能を果たしていた。そして、実際のところ external narrator の存在は研究者達の間で長い間無視されつづけてきた¹³。

しかし、external narrator は、Quentin の代弁者というわけでは決してない。表の分析に見られるように、narrator は共同体の perspective から語ることもあれば、自分の perspective から語るということもある。external narrator が、あくまで Quentin を一登場人物として設定しているという事実は、この narrator が読者に Quentin への共感を誘う働きをしているという側面とあわせて非常に重要なのであって、そのことはつまり external narrator が、Quentin を Rosa や Mr. Compson と同じ水準に置く視点を読者に提供することもできれば、逆に Quentin と読者との心理的距離を縮めることもできるという、読者と Quentin との心理的距離をコントロールする働きを持っていることを示している。第1章においては external narrator は主に Quentin と読者との距離を縮めるように機能していると考えられる。そのため、本章の検討のみから確証を得るわけにはいかないながらも、external narrator が Quentin の視点を相対化するのに重要な機能を担っているということではできそうである。

voice, perspective の2つの観点から、*Absalom, Absalom!* の第1章の物語言説の変換の様子を調べることで、この小説に特有の読者と作品との関係を生み出す仕組みについて考察してきた。まず普通ならば読者の共感を得やすい物語世界内の character narrator Rosa よりも、無口な聞き手 Quentin の方に読者はどのように共感していくのかという点から検討し、次のことがわかった。読者は Rosa の話が彼女の Sutpen に対する偏見を色濃く反映したものであることを他の character によって知らされ、さらに彼女が自分の被害妄想的な想像さえ現実として語ってしまうことから、彼女の話は歪曲されていると思い、彼女の哀れな話を鵜呑みにできず同情を妨げられる。その一方で、external narrator が Quentin の perspective からしばしば彼の思考を伝え、あるいはイタリックスの字体において Quentin の内面の声が伝えられて、結果として読者はどの character よりも Quentin の内面に多く接することになるため、この character に感情移入しやすいのである。

2番目の課題として読者と Quentin が Sutpen 家の秘密に関して得る情報の差を生み出す仕組みの解明を取り上げた。しかし第1章の範囲では、ここで取り上げた情報の差はまだ生まれていないことからこの課題は第2章以降の分析に持ち越されることになった。とはいうものの voice と perspective の転換を分析した結果、この2番目の課題を解明するには Quentin の perspective から語られた物語言説と、それ以外のものを比較検討すればよいのではないかという大きなヒントを得た。

最後に検討したのは、Quentin の視点を相対化する仕組みである。第1章の段階では読者と Quentin を同一視させる機能が強く働いているので、Quentin の視点を相対化する仕組みを検討するにはこの章はあまりよい材料とは言えない。それでも、本論における分析の結果、これまでの批評ではあまり重要視されてこなかった external narrator が、この第3の仕組みを解明する上で重要な手がかりを与えてくれるのではないかという指針を得ることができた。

このように、*Absalom, Absalom!* の物語言説を voice, perspective の2つの観点から分析することで、この作品全体の語りの技法を明らかにしようとしてきた。そして、第1章を分析した現時点では、全体を論じるにはまだ不十分ではあるが、かなり有望な手がかりを得ることができた。この作品が読者に与える特殊な読書体験を生じる仕組みは、2章以降の分析によって、徐々に明確に、十全なものとなっていこう。引き続き取り組んでいきたい。

key words; 1. William Faulkner. 2. *Absalom, Absalom!*. 3. Narrative Technique. 4. Voice. 5. Perspective.

<注>

1. 1936年に発表された書評の内、例えば、Max Miller は、“so many different persons are telling the story, and

so many stories are being told within stories, that for the life of me I frequently thought that Faulkner in all this confusion of morbidity was trying to play a grand game of hide-and-go-seek with all of us.” (Max Miller, “*Absalom, Absalom!*” *San Diego Union*, November 15, 1936, Feature Section, p.7. in *William Faulkner: The Contemporary Reviews*, ed. M. Thomas Inge [New York: Cambridge University Press, 1995], p.152) と評し、また W. E. Stegner は、この小説においては、矛盾した証言や偏見に満ちた情報を元に、Quentin が推理、推測してやっとならずに Henry が Bon を殺した動機が見えてくるのだ、と独特の真相暴露の仕方を指摘した後で、“Accustomed to having our fictional character complete, fully rounded, we feel cheated if an author rejects the omniscient lie at the basis of most fiction.” (W. E. Stegner, “New Technique in Novel Introduced.” *Salt Lake City Tribune*, November 29, 1936, p.13-D. in *William Faulkner: The Contemporary Reviews*) と述べ、両者ともにこの作品の曖昧さを欠点と見なしていることがわかる。

2. Hyatt H. Waggoner, *William Faulkner: From Jefferson to the World*. (Lexington: University of Kentucky Press, 1959), p.168.
3. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia 1957-1958*, ed. Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner. [Charlottesville, Virginia, 1959], pp.273-74.
4. Richard P. Adams, *Faulkner: Myth and Motion*. (Princeton: Princeton University Press, 1968), pp.193-94.
5. Ilse Duso Lind, “The Design and Meaning of *Absalom, Absalom!*” in *William Faulkner: Three Decades of Criticism*, ed. Frederick J. Hoffman and Olga W. Vickery, (East Lansing: Michigan State University Press.), p.286.
6. 私の分類の①のタイプにあたるものが、批評家達の意見の大半を占めている。Waggoner の他に、Joseph Gold は、“Faulkner forces the reader to undertake the examination [of the story of Sutpen] too. We must also balance the facts, as Quentin does. The result is that we come to Quentin’s understanding...” (Joseph Gold, *William Faulkner: A Study in Humanism From Metaphor to Discourse*, [Norman: University of Oklahoma Press, 1966], p.37.) と述べ、また Robert Dale Parker は、“The constant placing of effect before cause, coupled with the succession of newly discovered causes, each more plausible than the last...force the reader to join in, constantly revising, as the characters must, our idea of what happened.” (Robert Dale Parker, *Faulkner and the Novelistic Imagination*, [Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1985], p.130.) と述べている。その他、Walter Slatoff (Slatoff, *Quest for Failure: A Study of William Faulkner*, [Ithaca: Cornell University Press, 1960], p.201.), Doreen Fowler (Fowler, *Faulkner’s Changing Vision: from outrage to affirmation*, [Ann Arbor: UMI Research Press, 1983], p.45.), Carolyn Porter (Porter, “Faulkner and His Reader” in *Faulkner: the Unappeased Imagination*, [Troy, New York: The Whitston Publishing Company, 1980], p.243.), Karl Zender (Zender, *The Crossing of the Ways: William Faulkner, the South, and the Modern World*, [New Brunswick: Rutgers University Press, 1989.]p.36.), Warwick Wadlington (Wadlington, *Reading Faulknerian Tragedy*, [Ithaca: Cornell University Press, 1987], P.218.) 等、適宜参照されたい。
7. Adams と同じように、Judith Lockyer は、“by granting the reader the greater powers of perception, Faulkner endorses the novel as an entity that does contain truths.” (Judith Lockyer, *Ordered by Words: Language and Narration in the Novels of William Faulkner*, [Carbondale: Southern Illinois University Press, 1991.], p.71.) と説明している。
8. Lind と同じように、Walter Brylowski は、“With all the facts of the story as given him, it is finally the reader, however, who is filled with the sense of bondage, frustration, or absurdity, not only for Sutpen but for the narrators of the story.” (Walter Brylowski, *Faulkner’s Olympian Laugh: Myth in the Novels*, [Detroit: Wayne State University Press, 1968.], p.26.) と評している。
9. 本論における voice, perspective などの重要な概念、及び external narrator, focal character などの用語等は、物語論に関するジュネットの今日までの仕事に負うところが大きい。詳細は Gerard Genette, “Discours du recit, essai de methode” in *Figures III*, 1972, (花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクリール：方法論の試み』書肆風の薔薇)、及び, *Nouveau discours du recit*, 1983, (和泉涼一・神郡悦子訳『物語の詩学：続・物語のディスクリール』書肆風の薔薇) を参照されたい。
10. external narrator という用語は、3人称の narrator とか objective narrator とか言われているものとはほぼ同義である。広く一般的に使われている3人称の narrator という用語を私が採用しないのは、1人称、3人称という narrator に関する呼称の差違は、その narrator が語る物語世界に、自ら関わっているかどうかに関係してい

るという認識によっている。Mr. Compson は、彼が語っている物語に彼自身は関わっておらず、従って、その語りは、3人称が主体になる。このことから、この作品の場合は、1人称、3人称という narrator の区別は、その語り手が、*Absalom, Absalom!* という作品を全体として見たときの物語世界に character として含まれているかどうかを示す指標としては、不適切であるだろう。

意識の流れと呼ばれる、character の無意識を描写した言説を、どちらの語り手にゆだねるかは、物語論的には物議を醸し出す問題かもしれないが、いかに character 本人が言語化できない無意識を描出したものであろうと、そこでは、読者はその character の内面の声を聞くのだという理解のもとに、本論においては character narrator の範疇に入れて扱おうと思う。この部分だけを独立した範疇として扱う可能性も残されてはいるが、そうすることによって大きなメリットがある時以外は、むやみに範疇を増やして図式を複雑化することは、避けるのが好ましいと思われる。

11. 表が5項目の分類になっているのは、Rosa が他の character の台詞を直接話法で語ることがたびたびあり、その技法は、あたかも Rosa が報告する character の台詞が、その character 自身の声であるかのように読者に思わせるという重要な働きをしているので、voice の項に、external narrator と character narrator とに加えて、character という一つの欄をも設けたためである。
12. William Faulkner, *Absalom, Absalom!*, (New York: Vintage Books, 1990), p.4, ll. 14-28. 以下、*Absalom, Absalom!* からの引用は全てこのテキストにより、頁数及び行数は引用に続けて括弧内に示す。
13. 従来の批評においては external narrator と character narrator とは厳密には区別されていなかった。しかも narrator という用語では character narrator のことを意味し、external narrator の存在が無視される傾向があったために Quentin を相対化する視点が external narrator によって提示されているという可能性も見過ぎされがちだったように思われる。最近になってようやくこの点については、Dirk Kuyk, Jr. も、the third person narrator という用語を使ってではあるが、例えば、André Bleikasten が external narrator の存在に気づいていないことを指摘しており、彼の著書の中で批判しているので参照されたい (Dirk Kuyk, Jr., *Sutpen's Design: Interpreting Faulkner's "Absalom, Absalom!"* [Charlottesville: University Press of Virginia, 1990])。また、Hugh M. Ruppersburg は、著書 *Voice and Eye in Faulkner's Fiction* の中で external narrator という概念をきわめて有効に使う論を展開しているので参照されたい (Hugh M. Ruppersburg, *Voice and Eye in Faulkner's Fiction* [Athens: The University of Georgia Press, 1983])。

(言語文化学科 英語文化専攻)
(1995.10.31受理)